

2026/05/13 分野抄読会

終末期がん患者における予後予測指標の現状と課題

東北大学大学院 医学系研究科 公衆衛生学専攻
医学統計学分野 修士課程2年 菊地叶恵

概要

緩和ケアの導入時期は終末期がん患者の医療において臨床的に重要な課題であり、適切な意思決定には正確な予後予測が不可欠である。しかし臨床医による予後予測は不正確とされており、客観的指標の活用が求められている。この課題に対応すべく、緩和ケア領域ではPPI・PaP・PiPS・OPSなど複数の予後予測指標が開発されてきた。これらは使用する変数の種類（症状・身体所見・検査値・医師の主観的評価など）や予測対象・出力形式において異なる特徴を持つ。

しかし、既存の指標には共通した課題がある。第一に、指標の予測性能は患者集団・評価時点・予測期間によって異なり、単一指標の普遍的な適用には限界がある。第二に、現行の指標は特定の一時点における患者状態を評価するものであり、病状の経時的変化を反映しにくい。予後予測は一度きりのプロセスではなく、患者状態の変化に応じた継続的な評価が求められるが、この動的な性質への対応が不十分である。

本抄読会では、EASEDデータを用いた前向きコホート研究を中心に既存指標の性能を概観したうえで、上記の問題点を整理した。また、TRIPODの枠組みに基づく透明性ある指標研究の重要性を確認し、既存指標の改良や新規因子の追加による予測精度向上の可能性について、今後の展望を共有した。

参考文献

[1] Hiratsuka Y, Suh SY, Hui D, Morita T, Mori M, Oyamada S, et al. Are prognostic scores better than clinician judgment? A prospective study using three models. *J Pain Symptom Manage*. 2022;64(4):391-399. doi:10.1016/j.jpainsymman.2022.06.008